

恋人はスナイパー
エピソード3への道
十字架編 (完結)

コー・村木の別荘・リビングルーム
コーがいる。
ライフルで辺りを警戒している。
村人から預かった子供たちや凱歌の花嫁候補の娘たちを、暖炉から逃がしている。
昨夜、母親に連れて来られた少年の姿もある。
コーが、脅える子供たちを励ましている。
コー「(中) 暗くても泣くんじゃない。長いが、村へ通じている。必ず家族に会えるから、
がんばって歩いて行くんだぞ」
リビングルームの壁が、爆弾で吹き飛ばされる。
白い煙の中から、周が現れる。
周「(中) あ、ボス、ここにいたんですか」
コー、暖炉を守るようにその前に立つ。
ライフルを周に向ける。
最後の子供の姿が、暖炉の中に消える。
コー「・・・(安心)」
周が瓦礫を踏みしめながら、近づいて来る。
周「(中) ボスはひどいなあ。こんなに尽くしてきた私よりも、王凱歌を選ぶなんて・・・。
ショックですよ」
コー「(中) お前が密かに、自分の勢力を伸ばしていたことは、随分前から知っていたよ。
で、機は熟したのか？」
周「(中) もう少し、穏やかな方法をとりたいのですが」
コー「(中) ふん、俺たちに穏やかも何もないだろう」
周「(中) そうですね」
周の目が狂気に光る。
構えて、気を高める。
コーもライフルを捨て、構える。
気を集中させる。
2人の間で、気が渦を巻く。
リビングルームに飛びこんでくる凱歌。
コー「来るな！」
コーの気が一瞬、乱れる。
気のバランスが崩れる、
互いの気を受け、コーと周が吹っ飛ぶ。
凱歌はこらえる。
しかし、気の断片が服や体の表面を切り刻む。
周が立ち上がり、コーに向かって行く。
気が乱れた分、コーの方がダメージが大きい。
その前に立ちはだかる凱歌。
凱歌の拳と周の拳がぶつかり合う。
洗練された周の攻撃。
風にしなる竹のようなしなやかさで、止めていく凱歌。
思わず舌打ちをする周。
いったん離れる周。

それを追って攻撃を仕掛ける力は、凱歌にはない。
周が、薄気味悪い笑いを浮かべながら気を集める。
周の放った気の嵐が、凱歌を襲う。
それを弾く凱歌。
弾かれた気が、天井を破壊する。
瓦礫が落ちてくる。
倒れているコーを守ろうとする凱歌。
すかさず、周の邪悪な気が彼を襲う。
その嵐に巻き込まれ、くるくると凱歌の体が宙を舞う。
床に叩きつけられてしまう。
周が近づく。
立ち上がろうとした凱歌を蹴る。
転がる凱歌。
その服の背を引き裂く、周。
血に染まった凱歌の左肩。
その血を周が手の平で拭う。
鮮やかな狼が現れる。

周「(中) 狼だって？冗談じゃない。お前は、野良犬だっ！」

狼の刺青を踏みつける。

凱歌、歯を食いしばる。

周「(中) きゃんきゃん、ないてごらんよ。ご主人様に尻尾をふるんだ」

凱歌「(中) 陳も・・・自分がボスだと言っていた」

周「(中) あいつ！やっぱり。で、殺(や)ってくれたんだろうねえ」

凱歌「・・・」

周「(中) これで私が1 2 1 1のボスだ。香港のナンバーワンだ」

高笑いをする。

香港・陳が経営する中華料理店

店の中央のグランドピアノを弾いている、女性のピアニスト。

曲目は「アヴェマリア」。

傍らには大きなクリスマスツリー。

スローモーションで。

店内はほぼ満席で、陳派の連中が、にぎやかに食事中である。

そこへ乗りこんでくる周一派。

銃を撃ちこむ。

陳一派の方もテーブルの下から、銃を取り出す。

銃撃戦となる。

テーブルの上の料理がとぶ。

皿が割れる。

同・周が経営する賭博場

ピアノの音で「アヴェマリア」の曲が流れている。

スローモーションで。

リング上で戦っている2人の男。

興奮している観客たち。

大金が動き、満足そうな周の手下たち。

入口のドアを門番の男もろとも蹴破るようにして、陳一派が銃を手に乗りこんでくる。

ガスマスクをつけている。

銃を向ける周の手下たちに、ガス弾（催涙弾か）が撃ち込まれる。
大量のガスの中、銃撃戦が始まる。

同・陳が経営する中華料理店
ピアノの音で「アヴェマリア」が流れている。
スローモーションで。
血まみれで、散乱した料理の中に倒れている人々。
生き残った周一派が、煙草に火をつけほっとしている。
そこへ銃弾が撃ちこまれる。
店は警察に取り囲まれていた。
1人、また1人と銃弾に倒れる周一派。
最前線で指揮を取っている張。

同・周が経営する賭博場
ピアノの音で「アヴェマリア」が流れている。
スローモーションで。
リング上も観客席も、散乱した札の中に、人々が血まみれで倒れている。
その中に立っている、生き残った陳一派。
ガスマスクでその表情はわからないが、ほっとしている様子。
札を拾い、ポケットにねじ込んでいる者もいる。
そこへ、武装した警官たちが乗り込んでくる。
応戦するが、次々と倒されていく陳一派。

コー・村木の別荘・リビングルーム
凱歌を踏みつけている周。

コーの声「(中) 弟から、その汚い足をどける」

周「?(見る)」

コーが立っている。

コー「(中) 忘れたか、ボスは俺だ。周、悪いが、俺の取り引き相手が、裏切り者たちを肅清しただろうよ」

周「(中) 何っ!？」

いつの間にか、周の目の前に立っているコー。

コー「(中) 夢は終わったよ」

コーの蹴りが、周の腹にヒットする。

周、吹っ飛ぶ。

床に落ちた周が血を吐く。

コー「(鋭く) 凱歌!」

凱歌が目を開ける。

コー「お前が引き金を引いたんだ。決着をつける」

凱歌の目が狼になる。

立ち上がり、構える。

周も立ち上がり、型を構える。

周が向って来る。

凱歌は・・・動かない。

動く力がないのだと判断した周に、侮蔑の表情が浮かぶ。

凱歌の周りにオーラを感じ、コーが後ずさりする。

周が、燃えるような怒りの気を凱歌に放つ。

対して、凱歌は清冽な気で、周の気を包み込む。

一体化した気を、周に放つ凱歌。

周はその衝撃で吹っ飛び、壁を次々に突き破って瓦礫に埋もれた。

がっくりと膝をつきそうになる凱歌に、コーが呼びかける。

コー「そのまま立っている。まだ敵がいるぞ」

凱歌「？（見る）」

コー「そうだ。俺を倒さなくては、1 2 1 1はなくなるんだ」

凱歌「・・・あんたとは、戦えない」

コー「では、まず礼を言おう。周と陳を倒してくれてありがとう。よくやった。面と向かって殺しを依頼しても、お前はやってくれなかっただろう」

凱歌「あんたの手の中で、俺たちは踊らされていた、というわけか」

コー「いや。裏の世界は、本気でお前に任せようと思ったよ」

凱歌「裏？」

コー「ああ。そろそろ、表の舞台にも立ちたいと思ってな」

凱歌「滑稽だな。これ以上一体、何が欲しいんだ」

コー「人間の欲望は尽きない。1 2 1 1もそれを吸って、また大きくなる」

凱歌「化け物」

コー「俺を止めてみる」

コー、くるりと凱歌に背を向ける。

周との戦いで、服の背中が大きく破れている。

彼の肌に狼の刺青が・・・ない。

凱歌「！？・・・狼が」

コー「（気づいて）ああ。俺は入れなかったんだ」

凱歌「でも、確かに・・・」

コー「お前が逢ったのは、兄貴だ」

凱歌「ということは・・・あんたは？」

コー「死んだ、弟の方さ」

凱歌「なぜ？」

コー「あの、覇権争いの激しい時に、ボスが死んだらどうなったと思う？内側からも外側からも、1 2 1 1は潰されただろう。俺が死んだ方がよかったんだ」

凱歌「周と陳は、そのことを？」

コー「あの頃は必死だったから、協力してくれた。だが、あいつらのボスはやはり、兄だったようだ」

凱歌「辛かった？」

コー「？」

凱歌「自分を殺して生きてきたのは」

コー「・・・」

香港・安ホテルの一室（回想・17年前）

1 2 1 1が、凱歌のために用意したねぐら。

ベッドに、うつぶせに寝かされている凱歌（20）

その左肩から背中にかけて、美しい狼の刺青が息づいている。

ベッドに座って、それを眺めているボス（年齢不詳）

ドアが乱暴に開き、コー（年齢不詳）が飛びこんで来る。

凱歌の刺青に息をのむ。

コー「なぜだ、兄さん。こんなことをするために、こいつを捜しだしたんじゃない」

ボス「（顔も上げずに中国語で）この子はいいいよ。いい殺し屋になる。組織のために働いてもらう」

コー「そんなこと・・・俺だけでたくさんだ」

ボス「(コーを見て中国語で)お前は、組織を嫌っている。俺にも逆らってばかり・・・日本語で話すな、と言っただろ」

コー「俺たちの母さんの国の言葉だ」

ボス「(中)ふん、女々しいヤツ。あいつらが、何をしてくれたというのだ」

コー「兄さん、俺は・・・日本へ行く」

ボス「(凱歌に目を移し中国語で)今は駄目だ。お前も凱歌も、俺のそばにいる」

コー「この子にすべてを話したのか?承知したの?」

ボス「(中)まさか」

コー「俺たちは、どうやってこの子に償うんだ」

コー、凱歌に近づく。

震える手で、彼の頭を優しくなでる。

悲しそうな目で弟を見つめる。

ボスの声「(中)これからが正念場なんだ。兄弟3人で香港を、いや、アジアを支配する」

コー、兄のことも悲しい目で見つめる。

同・車の中(回想・16年前)

凄いスピードで走っている車。

後部座席では、コーが銃弾を浴びたボスを抱いている。

コー「逝くなー!俺はどうしたらいいんだよ」

ボス「(中)悪いな。お前に少し・・・頑張ってもらうことに・・・」

血を吐く。

コー「(運転手に中国語で)急げ!」

がっしりとコーをつかみ、

ボス「(中)凱歌をうまく使え!」

コー「なんだよ、こんな時に・・・。なんでそんなこと、言うんだよ」

ボス「夢・・・なんだ」

コー「!?・・・日本語」

ボス「1211は俺の夢・・・」

ボス、コーにすべてを託して息絶える。

コー、泣き叫ぶ。

コー「勝手なんだよ、あんたはー!」

コー・村木の別荘・リビングルーム(現在)

昔を想い出しているコー。

銃声が聞こえる。

凱歌「早く逃げよう」

コー「俺はあの子供たちを、解放する気はないぞ」

凱歌「・・・1211を、あんたを潰すしかないのか」

コー「そういうことだ」

コーが構える。

凱歌も構える。

空気が一気に緊張し、ぴんと張り詰める。

コーが拳を繰り出してくる。

凱歌は一瞬、躊躇する。

それを、コーは見逃さなかった。

どんどん攻めてくる。

守備に精一杯の凱歌。

コー「そんなことで、お前の夢を守れるのか」

コーの拳や蹴りには、気がこもっている。
それが凱歌にダメージを与えていく。
コーの拳が凱歌の心臓を狙う。
両の手で止める凱歌。

コー「！？」

気をこめて、拳を押し返す凱歌。
凱歌の手から血が噴き出す。(無理があったか)
吹っ飛ぶコー。
それを追って凱歌も跳ぶ。
空中で凱歌の蹴りが、コーにヒットする。
床に転がるコー。
凱歌が、コーの心臓を狙って膝から落ちてくる。

コー「！」

だが、凱歌はとどめをさせず、コーの横、ぎりぎり、床に膝を埋めてしまう。
自分から避けたのだ。
うなだれる凱歌。

コー「おっ、まえはー！」

凱歌の膝から流れだす血。

コー「どうして、いつも自分を傷つけるんだ」

凱歌「(見て)できないよ、兄さん」

コー「え？」

凱歌「もう、この世に2人きりなんだよ」

コー「・・・駄目だなあ」

凱歌「？」

コー「兄貴が死んだ時、俺の心も墓の中に埋めちまったと思ってた・・・。(苦笑)俺は、弱いな」

凱歌「知ってますか。強い者は弱い者に負けるって・・・。人はそんなに簡単に、優しさを捨てられないと、思うんです」

凱歌の目が、穏やかなものになる。

コー「ああ、お前の目がやっと、明るくなった」

凱歌の胸元の十字架に目を留める。

コー「お前の罪など、俺が全部背負って、地獄へ持って行ってやる」

銃声が近づいている。

凱歌・コー「！」

凱歌とコーが、お互いを支え合って立ち上がる。

コー「暖炉から外へ出られる。子供たちも無事に逃げた」

凱歌「!(はっとなる)」

何か言おうとした時、外に気配を感じた。

撃ちこまれる銃弾。

2人を貫く。

コー「早く、行け！」

と、凱歌を突き飛ばす。

凱歌「兄さん！」

更に撃ちこまれる銃弾が、2人を完全に分けてしまう。

コー「(笑って)おとこ女によろしく、な！」

凱歌、心を残したまま、暖炉へ飛び込む。

コー「(つぶやく)兄さん・・・か」

コーに向かって銃を撃ちながら、男たちが近づいて来る。

血に染まるコー。

コー「守って・・・みるか・・・」

最後の力をふりしぼって気を高める。

男たち、それに気がついて逃げようとするが。

コー「のろまが！」

コー、集中させた気を爆発させる。

同・暖炉の中のトンネル

出口を目指して、傷ついた体を引きずるように歩いて行く凱歌。

その後を追うように、血が床に落ちていく。

大きな衝撃音。

凱歌「！？(振り返る)」

凱歌、コーの最期を悟る。

再び体を引きずるように進む。

同・リビングルーム

倒れているコー。

男たちも倒れている。

コー「兄さん・・・あんたの夢と・・・心中してやるよ」

こと切れる。

村の中

大きな木の陰にトンネルの出口があった。

這い出てくる凱歌。

その目の前に、鍬が突きだされる。

凱歌「!(見上げる)」

村人たちだ。

村中の人間が集まっている。

脅えた目をして、武器(庖丁や鍬、棒等)を手に、凱歌を囲んでいる。

大人たちの後ろに隠れている、コーに逃がしてもらった子供たち。

凱歌「(中)僕だ。凱歌だよ、コーの弟の」

よろよろと立ち上がる。

その目の前に、村人たちの握った武器が突きだされる。

凱歌、改めて村人たちを見る。

昨夜の母親と少年の姿もある。

母親が厳しい顔で少年をかばい、庖丁を凱歌に向けている。

凱歌「(ぼつりと)気がついたわけだ、僕らの正体に」

他の村人たちの表情からも、親愛の情は感じられない。

昨夜、凱歌に向けられていた笑顔は消え、今は敵意と恐怖だけが向けられている。

凱歌「(中)わかった。出て行くよ」

ふらつきながら、そばにとめてある古いトラックの方へ歩いて行く。

地面に血が滴り落ちる。

村人たち、武器をかざしながら凱歌と共に移動していく。

凱歌「(中)だけど」

凱歌の足が止まる。

村人たちも緊張して、足を止める。

コーの別荘を指し、

凱歌「(中国語で激しく)いいか!必ず、あの中からコー・村木を、兄さんを探しだせ!そ

して家族のところへ、一緒に葬ってやるんだ！」

村人たち、ひそひそと囁き合う。

凱歌「(中)もしもやらなかったら」

と腰から銃を抜く。

銃口を村人たちに向ける。

脅えてうなづく村人たち。

凱歌「(中)そのくらいの恩を返せ」

トラックに乗りこむ凱歌。

村を去って行く。

雲が低くたれこめている。

結局、故郷で晴れた空を見ることはなかった。

途中、トラックの窓から拳銃を、湖へ投げ捨てる。

村人たちに銃を向けてしまった、自分への怒り。

拳銃が湖に沈んでいく。

香港・八雲の祖母の店内

八雲と祖母が、店の品物を手入れしている。

が、2人共、居間から聞こえてくるきなこの声の方に、気持ちがいつている。

きなこが張と、電話で話しているのだ。

きなこの声「(英)そうですか……。まだ、何も？いえ、お忙しいところ、申し訳ありませんでした」

祖母が心配そうに八雲を見る。

八雲「(中)大丈夫さ。あいつは……。そうだ！もしかしたら、もう、そこまで来ているかも」

八雲、店の外へ飛び出して行く。

祖母は、やはり心配そうな目で居間の方を見る。

同・祖母の家の居間

通話を終えた携帯電話を、握りしめているきなこがいる。

同・祖母の店の外

八雲が、行き交う人たちの中に、凱歌の姿を捜している。

その頭上に広がる青空。

同・ショッピング街

ショッピング街の上に広がる青空。

ブティックが入ったビルが建ち並んでいる。

大きなデパートもある。

クリスマス前からのバーゲンが続いており、街は活気づいている。

もうすぐ今年も終わり、新しい年を迎えることになる。

大勢の人が、街に繰り出している。

おしゃれをして、買い物を楽しんでいる。

その中を、明らかに場違いな男が歩いて来る。

王凱歌だ。

ぼろぼろに傷つき、歩いているのがやっとなのである。

人々が迷惑そうに避けていく。

傍若無人な若者のグループが、もろに凱歌にぶつかる。

倒れる凱歌。

若者のグループ、文句を言いながら行ってしまふ。

倒れたままの凱歌。

誰一人として、手を貸そうとはしない。

力をふりしぼって、ようやく立ち上がる凱歌。

足を引きずりながら、よろめきながら、一生懸命に歩いて行く。

× × ×

フラッシュバック。

ヘリコプターの中から、泣きそうな顔で凱歌を見ているきなこ。

× × ×

きなこへ向かって1歩、また1歩、進んで行く凱歌。

歩くのに必死で、凱歌には見えなかった。

ビルとビル間の小さな隙間、ゴミ等がごちゃごちゃと置いてある所から、1人の男が幽霊のように立ち上がったのを。

その黒い影が、凱歌の方へ近づいて来る。

ゆらり、ゆらり・・・と。

遂に、その影が凱歌と重なった。

凱歌「(見て) 范・・・火清・・・」

そばに来るまで、気がつかなかった。

彼特有のキラキラした殺気を、まるで感じなかったから。

凱歌、自分の胸に視線を移す。

小刀(賭博場で、范がかすめ取った物)が、深々と刺さっている。

それを握っているのは范。

凱歌の胸元の十字架が揺れた。

范「(気づいて) あ、兄さん、つけていてくれたんだ。うれしいな」

にっこりと笑う范は、あの賭博場で遭った時のままの姿である。

誇らしげに輝いていた金色の髪は薄汚れ、服も埃だらけだ。

しかも、折れた腕を自分でやったのか、汚い布で吊っている。

病院で治療したあとなど見られない。

凱歌「(哀しそうに) 1 2 1 1 は・・・お前を・・・捨てたのか」

凱歌の耳に口をつけてうれしそうに、

范「飛ぶんだよ、俺たち。兄さんの故郷(ふるさと)まで」

范、小刀を凱歌から抜く。

凱歌「うっ!・・・」

凱歌の胸から血が流れ落ちる。

胸を押さえ、こらえて立っている凱歌。

自分の胸に小刀を向ける范。

凱歌「(低く) よせ!」

范、なんのためらいもなく、自分の胸に小刀を突きたてる。

凱歌「!？」

范「やっと重なったね。あの雨の夜・・・引き裂かれた・・・俺の運命と凱歌兄さんの運命が」

范、頭痛がして頭を押さえる。

范「探したんだよ、竹の森の中の兄さんの家を。でも、1人じゃ見つからなくて」

范がへなへたと座りこむ。

凱歌「すまない・・・。約束があるんだ・・・。行くよ」

凱歌、范の脇をすり抜け、歩きだす。

やっと、気力で歩いている。

范がコンクリートの上を、這いずり回っている。
范「兄さん！凱歌兄さん、どこ？」
その呼ぶ声が、凱歌のところまで届く。
たまらなくなつて、范のところへ帰つて来る。
凱歌「ここに・・・いるよ」
范のそばに座りこむ。
范「(上を見て) ああ、兄さん・・・竹が本当に綺麗だ・・・。葉の緑が鮮やかで」

凱歌、見回す。
2人は見事な竹林の中にいる。
青々とした竹が、真っ直ぐに空へと伸びている。
そこは、凱歌が育った家がある竹林だ。
子供の頃と同じ風景が、広がっている。
風に竹がしなり、その度に葉が擦れ合つて、静かな心地よい音を奏でている。
コンクリートの道は消え、2人、柔らかな土の上にいる。
緑の風は2人の髪を揺らし、優しく頬を撫でた。
鮮やかな色の竹の葉が、何枚も何枚も降り注いでいる。
雨のように。
いや、その静けさから言って、雪のように、と言った方が似合うだろうか。
それが土の上に、緑色のジュータンを織り上げている。
范が体を横たえる。
范「ずっと・・・来たかったんだ・・・。兄さんの話を聞いた・・・時から・・・」
凱歌「そう・・・か」
と、穏やかな笑顔を見せる。
凱歌、范の額にかかる髪を優しくかきあげて、目を覗きこむ。
その目に映る竹林。
凱歌「范・・・知っていたか」
もう范は答えない。
凱歌「お前・・・やっぱり・・・あの頃と、ちっとも変わっていなかった」
風が強く吹き、葉を舞い上げる。
その風に混じつて、「アヴェマリア」(ピアノ)が聴こえてくる。
凱歌「!(顔を上げる)」
風がすっかり止む。
再び、静かに舞い落ちる葉が、時(と言えるだろうか)を刻み始める。
市江(33)が竹の緑の葉が敷きつめられた上で、黒いグランドピアノを弾いている。
彼女の着物も、上品な淡い緑色だ。
ピアノの上にも、葉が降り注いでいる。
市江、弾くのを止める。
凱歌を見て、微笑む。
市江が立ち上がり、こちらへやって来る。
母に抱きしめてもらおうと、目を閉じて待っている5歳の凱歌。
カサッカサッと、葉を踏みしめて近づいて来る足音。
気配を感じて目を開けると、きなこがいた。
母のように、優しく微笑んでいる。
凱歌、37歳の現在の姿になっている。
凱歌「よかった・・・。僕は・・・君を迎えに来ることが・・・できたんだね」
凱歌、安心したようにきなこに体を預けていく。
が、彼を受け止めようとするきなこの姿は、あまりにもはかなく・・・。

凱歌の体がゆっくりと、范の隣に倒れていく。
そこには、もはや、きなこの姿も母の姿もなかった。
もちろんピアノも。
凱歌と范の上に、舞うように葉が落ちてくる。
その音が、さらさらと聞こえている。
鮮やかな緑が、静かに彼らを覆い隠していく。
凱歌の胸元の、血まみれの十字架さえも。

コンクリートの歩道に横たわる凱歌と范。
本当の兄弟のように、仲良く寄り添っている。
遠巻きにして見ている野次馬たち。
凱歌の瞳には、もう竹林は映っていない。
ビルによって、四角く切り取られた青空だけが映っている。

同・八雲の祖母の家・物干し台
洗濯物を干しているきなこ。
ふと、空を見上げる。
凱歌の瞳に映っている、同じ青空を見つめている。
きなこの目の中に広がる異国の空。

青い空
東京の青い空。
数ヶ月が過ぎ、春の空となっている。
その空の下を歩いて行く、中国人の男性の後ろ姿がある。
バッグを肩にかけ、留学生らしい。

中華料理店「紅龍」・内
昼時。
外国からの留学生たちが、食事をしている。
厨房には、雁太郎と牛田が立っている。
接客に追われている美智とはな。

同・前
先ほど、青空の下を歩いていた中国人男性が来る。(後ろ姿)
ためらっていたが、戸に手をかけ、開ける。(後ろ姿)
忙しそうに働いている美智が気がつき、こちらを見る。
美智「(威勢良く)いらっしゃいませ！」

同・内
入口に立っている中国人男性。
中国人男性「(びくっとなり、中国語で)こんにちは。あの・・・」
と言ってうつむいてしまう。
その姿が美智に、初めて会った時の凱歌を思い出させる。
× × ×
フラッシュバック。
空港のロビーで雁太郎に怒鳴られて、おどおどしている凱歌。
× × ×
美智「(優しく)怖がらなくていいのよ」

中国人男性「困ったこと、ここ、行け。友だち、教えた」
美智「そう。ま、お入りなさい。はな、通訳、通訳」
はな、たどたどしいが、中国人男性に中国語で話しかける。
彼の緊張がほぐれて、笑顔になる。
雁太郎「おーい、はな、腹、減ってないか訊いてくれ」
はなが中国語で尋ね、男性が恥ずかしそうに返事をする。
はな「父さん、何か作ってあげて」
雁太郎「あいよ」
すると客の中の、やはり中国人であろうか、青年が立つ。
青年「あ、親父さん、僕、作らせて」
雁太郎「お、作れんのか？」
牛田「(うれしそうに)本場だ、本場の中華料理だ」
厨房に入って来る青年。
雁太郎、凱歌の姿を思い出す。
× × ×
フラッシュバック。
厨房で料理を作っている凱歌。
× × ×
雁太郎、一瞬寂しげな表情をするが、すぐに笑顔になる。
雁太郎「やけど、するなよ」
温かな雰囲気店内。
きなこの声「ホイさん、私たち、大した力はないけど、自分のできるところから始めてる」

真っ暗な部屋
明かりがまったくくない部屋。
少女たちのひそひそ声がしている。
男の声がそれを制する。
突然、バン！と外側から蹴られ、ドアが壊される。
明るい日の光と共に、外に女の影が現れる。
逆光で顔はわからないが、
女の声「警察よ！」
きなこの声だ。
室内から、男が1人、きなこに飛びかかっていく。
それを足を引っ掛け、背負い投げで吹っ飛ばす。
「わー」と下へ落ちていく男の声。
もう1人、女がナイフを手にきなこを襲ってくる。
ナイフを叩き落とし、女を蹴飛ばす。
女は気を失ってしまう。
きなこ「(室内に向かって)もう大丈夫よ」
外からの日の光で、部屋の隅に少女たちが固まっているのが見える。
皆、異国の少女たちである。
脅えている。
きなこ、少女たちに手を伸ばす。
きなこ「おいで」
尚も脅えている。
が、1人の少女が、そろそろと近づいて遠慮がちに手を伸ばす。
少女、きなこの手につかまる。
きなこ、屈んで少女に視線を合わせる。

きなこ「怖かったね。家へ帰ろうね」

すると、他の少女たちもわっと、きなこにすがりついてくる。

抱きしめて、

きなこ「辛かったね。ごめんね、遅くなって。ほんと、ごめん」

アパート・前

少女たちが閉じ込められていた部屋のあるアパート。

部屋は2階にある。

そこから、続々と出て来る少女たち。

警視庁や入国管理局に保護される少女たち。

国際部国際二課の船木や黒谷、清水らの顔も見える。

少女たちを監禁し働かせていた数人の男女が、逮捕されている。

同・少女たちの部屋

雨戸も開けられ、部屋の中がやっと明るくなった。

小さな部屋に大勢の人間がいたため、痛みがひどい。

少女たちの苦しみが、伝わってくるようだ。

1人残っているきなこ。

きなこ「もう誰もいませんか？出て来て！大丈夫だから」

と言いながら、押入れの中や風呂場等をのぞく。

人影もなく、返事もない。

きなこ「よし、いいかな」

少女の声「(中)ありがとうございます。私、あなたを忘れません」

きなこ「え？」

その聞き覚えのある中国語に、驚いて振り返るきなこ。

戸口のところで、微笑んでいる凱歌の姿・・・が、すぐに1人の少女の姿になる。

きなこ「・・・今、何て？」

思わず、声がかすれてしまう。

その少女の後ろから、年長の少女が現れる。

年長の少女「あなたを忘れないって、言ったんです」

少女たちの立っている場所から、凱歌の幻が現れきなこに近づいて来る。

凱歌、きなこの肩を抱いて、頬と頬を交互に合わせる。

きなこが凱歌を抱きしめようとする、消えてしまった。

きなこ、自分の肩を抱いてしまう。

きなこの目から、涙が一粒だけ、はらりとこぼれて落ちた。

少女たち、はっとする。

きなこ「ごめんなさい。昔、ううん(首をふり)そんなに前のことじゃないのに・・・。

とっても好きだった人に、同じことを言われたものだから・・・。思い出しちゃった・・・」

そうして、寂しそうに笑った。

年長の少女は、その人がもうこの世にいないことを悟った。

きなこ、すぐにきりっと顔を引き締め、刑事の顔になる。

きなこ「さあ、行きましょう」

同・少女たちの部屋の外

部屋から出て来た、きなこ2人の少女。

アパートの狭い階段を、少女たちを先に行かせる。

その後ろ姿に、凱歌の声が重なる。

凱歌の声「あの子たちを、僕のようにしてはならない」

きなこも階段を降りようとする。
その頬を、薄桃色の花びらがかすめた。
きなこ「！？(見る)」
アパートの脇に、1本だけ桜の木がある。
手入れも行き届いていないような、痩せた木だ。
それでも、花が満開となっている。
きなこ「春が・・・来てたんだ」
それは決して豪華ではないが、懸命に生きているひたむきさがある。
その清い姿に、凱歌を重ねた。
きなこの声「『そんなことないよ』・・・ホイさん、あの時、そう言ってあげればよかった
ね。今、私たちは、あなたのような『人間』を育てたいと思って、がんばっているんだ
よ」
桜を見つめるきなこから、自然な笑みがこぼれる。
きなこ「(言葉をなぞるように中国語で)私、あなたを忘れない」
階段を降りて行く。
船木が近づいて来る。
船木「円道寺君、きみ、笑ってるよ」
きなこ「!(気がつく)」
船木「(うれしそうに少し涙ぐみ)笑ってるよ!よかった・・・」
それを聞きつけて、黒谷と清水もきなこのところへ来る。
黒谷「きなこちゃんにはやっぱり、笑顔が似合うね」
清水がうんうんと、うなずいている。
船木、黒谷、清水に囲まれ、少しはにかんだ笑顔を見せるきなこ。
見守るように咲いている桜。
きなこの声「ホイさん、異国の冬の中で凍ってしまった私の心が、故郷(ふるさと)の春
の中でとけ始めました」